

## 〈提 題〉

アパテイアの多義性と「慰めの手紙」  
 ——東方教父におけるストア派の両義的影響——

土 橋 茂 樹

ストア派のものとして一般的に受け容れられている倫理思想が、どのような形で東方キリスト教思想に継承され流布していったのか、その点をヘレニズム哲学受容に際しての東方教父たちの両義的態度を明らかにしつつ考察すること、それが私に課せられたさしあたりのテーマである。ストア派の倫理思想といえば、徳論はもちろんのこと、社会倫理的な観点からは、ストア的「善悪無記」(ἀδιάφορα)の問題とキリスト教的な「施し」(ἐλεημοσύνη, εὐποιία, φιλοπρωχία)の励行との関係<sup>1)</sup>、ストア的な世界市民の説<sup>2)</sup>、さらには近年、アリストテレス倫理学とカント道徳哲学との伝統的対立図式の再検討を促すストア的幸福主義における道徳性の問題<sup>3)</sup>など、検討すべき課題は多い。中でも「アパテイア」概念をめぐる問題は、もはや語り尽くされ陳腐化した感すらある一方で、その実、特に東方教父にあっては、ややもすると漠然とした一般論にとどまりがちである。そこで今回は、古代末期における「慰めの手紙」(παράμυθητικαὶ ἐπιστολαί)という、一般にはあまり知られていない書簡群を具体的な素材として、アパテイアをめぐる問題について少しく考察を加えてみたいと思う<sup>4)</sup>。

1) Cf. L. W. Countryman, *The Rich Christian in the Church of the Early Empire*, New York/Toronto, 1980.

2) 信頼すべき基本文献として, M. Schofield, *The Stoic Idea of the City*, Chicago, 1999.

3) 記念碑的論文集として, S. Engstrom and J. Whiting (eds.), *Aristotle, Kant, and the Stoics*, Cambridge, 1996.

4) 「慰めの手紙」という文学ジャンルの研究は, C. Favez, *La Consolation Latine Chrétienne*, Paris, 1937 にしても, M. M. Beyenka, *Consolation in Augustine*, Washington, 1950 にしても, 当初は西方ラテン教父に特化したものであったが, R. C. Gregg, *Consolation Philosophy: Greek and Christian Paideia in Basil and the Two Gregories*, Cambridge, Mass.,

たとえば、カッパドキア教父の先陣を切るカイサレイアのバシレイオスは、360を超える膨大な書簡を残したが、その中に極めて印象深い「慰めの手紙」が19通含まれている<sup>5)</sup>。たとえば、寡婦となったプリソンの妻に宛てたバシレイオスの書簡302は、「慰めの手紙」と呼ばれる書簡群の典型と言える。それは以下のように始まる。

もっとも善き人プリソンを襲った災いの報せを受けて、私たちが一体どれほど深く嘆き悲しんだことか、改めて申すまでもありません。あの方と昵懇にしていた者のなかで、あの方が突然人の世から奪われたことを聞いてもなお、あの方がもはやこの世におられぬことを私たち皆に共通の生命の痛手 (*κοινή ζημία τοῦ βίου*) と思わぬ、そんな石のように冷たい心をもった者など、一人もおられぬはずですから。しかし、私たちの悲しみなど較べものにならないほどのあなたの悲痛を思えば、今度はあなたのことを心配せずにはおれません。……このたびの御不幸で最も深く心を傷つけられているのは他ならぬあなたなのですから。  
(Basil, *Ep.* 302)<sup>6)</sup>

ここでのバシレイオスの意図は、一読して明らかのように、悲しみという情念を取り除こうとすることではなく、むしろ共に悲しみ、情念を共有する (*συμπαθεῖν*) ことによって遺族の深い悲しみを和らげることにある。しかし、その一方で彼は、情念からのまっつき解放・無情念 (アパテイア) を修道的生の目的として修道士たちに強く説き勧める書簡も数多く書いている。一見すると彼の情念に対する態度は矛盾しているようにさえ見える。本提題では、情念に対するバシレイオスの態度のこのような二つの異なった位相に関して、修道院における禁欲主義的な生の目的、つまりはギリシア教父における人間性の完成という観点から理解を試みる一方で、

---

1975の登場によって東方教父圏においてもようやくその意義が認知されるようになった研究領域である。

5) その内訳は、配偶者あるいは親族を亡くした遺族に宛てたものが9通 (Ep. 5, 6, 101, 184, 206, 269, 300, 301, 102), 教区の司教を、死によって、あるいはアレイオス派との抗争によって失った当該教区の信者たちに宛てたものが4通 (Ep. 28, 29, 62 [以上が前者], 227), さらにアレイオス派の勢力下に置かれ迫害を受けている者たちに宛てたものが6通 (Ep. 139, 140, 238, 247, 256, 257) となる。

6) 本稿では、バシレイオスの書簡を参照・引用する際は、ロウブ版テキスト (R. J. Defferrari (tr.), *Basil, Letters*, vol. 3, Cambridge, Mass., 1953) を使用した。

悲嘆にくれる者と共に悲しむことによって慰めを与えようとする「慰めの手紙」に見いだされる非ストア的態度（むしろペリパトス派的な「適度な情念」(μετριопάθεια)の重視)との関係について、やや立ち入った具体的な考察を試みたい。彼のアパテイアに関する多義的な理解を、東方キリスト教圏におけるストア派倫理想受容の一つの典型として示すことができれば幸いである。

具体的には、まず、1においてバシレイオスにおけるパトスの三区分とそのストア派起源が考察される<sup>7)</sup>。次いで2で、そのパトスの意味区分に対応するバシレイオスにおけるアパテイアの多様な意味が吟味・分類され、最後に3で、それまでの分析の結果を用いつつ、バシレイオスとプルタルコスとの両者それぞれの「慰めの手紙」におけるアパテイアとメトリオパテイアの関係解明が目指される<sup>8)</sup>。

### 1. バシレイオスにおけるパトスの三区分とそのストア派起源

バシレイオスの書簡 261 には、パトスに関して以下のような記述が見出される。

人間の諸情態 (πάθη) が神性そのものと交わると語ることは、その思考において決して一貫性を保持し得ないし、次のことを知らぬ作業である。すなわち、単なる肉体の受動的状態 (σαρκὸς πάθη) と魂に与る肉体の情動 (σαρκὸς ἐμψύχου πάθη), そして肉体を用いる魂の情念 (ψυχῆς σώματι κεχρημένης πάθη) とがそれぞれ異なるということ。また、これらの内、あるものは自然なものであり、生物に必要なものであるが、他のものは悪しき意志によって (ἐκ προαιρέσεως μοχθηρῆς), あるいは嫉の悪さ、徳への訓練不足によって生じたものである。(Basil, *Ep.* 261, 3)

バシレイオスはここで、パトスを①「<sup>パ</sup>「<sup>ト</sup>肉体の受動的状態」, ②「<sup>ズ</sup>魂に与

7) この点に関しては、A. Dirking, "Die Bedeutung des Wortes Apathie beim heiligen Basilius dem Großen," *Theologische Quartalschrift* 134, 1954 が今なお基礎文献として有益である。

8) メトリオパテイアとアパテイアの両概念に関わるヘレニズム期の論争を見通し良く纏めたものとして、J. M. Dillon, *Metriopatheia and Apatheia: Some Reflections on a Controversy in Later Greek Ethics*, in: *Essays in Ancient Greek Philosophy*, vol. 2, New York, 1983.

る肉体の情動<sup>パトス</sup>」, ③「肉体を用いる魂の情念<sup>パトス</sup>」, の三つに区分している。こうした区分の仕方を彼がどこから知ったのか, その源泉については, アレクサンドレイアのクレメンス, あるいはプルタルコスという可能性が挙げられるが, 後者は中期ストア派のポセイドニオスの説を要約したもので興味深い。以下がその引用である。

確かにポセイドニオスは, 少なくとも彼の諸情態の分類において, 以下のように述べている。すなわち情態のあるものは, (i)「端的に魂に属する情念<sup>パトス</sup>」(τὰ ψυχικὰ ἀπλῶς) であり, あるものは (ii)「端的に肉体に属する受動的状態<sup>パトス</sup>」(τὰ σωματικὰ ἀπλῶς), また別のあるものは (iii)「肉体に属するが, 影響が魂にまで及ぶ情動<sup>パトス</sup>」(τὰ περὶ ψυχὴν σωματικά) であり, 他のもは (iv)「魂に属するが, 影響が肉体にまで及ぶ情動<sup>パトス</sup>」(τὰ περὶ σωμαΐ ψυχικά) である。」(Plutarchus, *De libidine et aegritudine*, 6)<sup>9)</sup>

ここでポセイドニオスのパトス区分として挙げられているのは, (i)「端的に魂に属する情念<sup>パトス</sup>」, たとえば欲望, 恐れ, 怒りなど, (ii)「端的に肉体に属する受動的状態<sup>パトス</sup>」, たとえば熱, 冷, 収縮, 拡張など, (iii)「肉体に属するが, 影響が魂にまで及ぶ情動<sup>パトス</sup>」, たとえば気だるさ, (黒胆汁に起因する) 憂鬱, 苦痛など, (iv)「魂に属するが, 影響が肉体にまで及ぶ情動<sup>パトス</sup>」, たとえば身震い, 顔面蒼白, (恐れや悲しみによる) 表情の変化など, 以上である。これらは, 魂のパトス, 肉体のパトス, それらの混合, と纏め直せば, (ii) が①に, (i) が③に, (iii) (iv) が②に, それぞれ対応することは明白である。バシレイオスは, これらパトスの或るものは自然なもの, 必要なものであるが, 他のも (悪しき情念) は, (ポセイドニオスが理性からの逸脱と解するのに対し)「悪しき意志」によるものとみなす。また, バシレイオスがクレメンスと大きく異なるのは, キリストが彼の内なる人間性によって「自然なパトス」(①と②)を受容するとはっきり主張する点にある。この場合, 彼の両性説的キリスト理解により, キリストにおける神性にふさわしくない「悪しき (ἀπὸ κακίας) 情念」すなわち罪については, キリストに一切関与しないとされる。この点を加味

9) この断片のテキスト及びコメンタリーとして, I. G. Kidd, *Posidonius*, vol. I, Cambridge, 1989<sup>2</sup>, p. 140; vol. II (ii), 1988, pp. 560-2 参照。

し、倫理的に重要なパトス概念を分類し直せば、苦痛や病弊などの「情動」、怒り、恐れ、悲しみなどの「情念」、さらに罪として性格付けられる「悪しき情念」、以上がバシレイオスに固有の倫理的パトス理解とみなしてよいであろう。

## 2. バシレイオスにおけるアパテイア概念

以上のパトス区分から、アパテイア概念も、さしあたり、①「身体的情動の除去」、②「情念の根絶」、③「罪の除去」というように分けられる。

このうち①に関しては、『聖霊論』第 18 節において、「不可捉な神は、自らの受苦によって私たちに苦しみからの救いをもたらすために、「身体的情動の一切ない仕方(ἀπαθῶς)」肉体を介して死と一つに組み合わせることができた」と述べられている。この意味でのアパテイアは、神の「不死性」「不動性」と同義とみなし得るだろう。その限りで、この意味でのアパテイアは決してパトスと相容れることはない。したがって、キリストにおける人性は、この意味でのアパテイアを受容することはできない。

②「情念の根絶」という意味でのアパテイアも又、当然、神に相応しいものであるが、この意味でのいわば絶対的なアパテイアは人間にとって理念に過ぎない。それは、一方では修道生活の理想となる。友人ナジアンゾスのグレゴリオスに隠遁生活を勧める書簡 2 において、「世間からの隠遁は、世間から身体的に外に出ることを意味するのではなく、身体との共感(συμπάθεια)から魂を切り離すことを意味し」、隠遁先である「荒野は、私たちの情念を鎮め、情念を魂から完全に切り離すための閑暇を理性に与えてくれる」と述べられているように、悪しき情念の除去は修徳修業の目的である。この限りでは、ストア派の影響が色濃い。しかし他方で、感謝についての説教においてバシレイオスは、「無感覚(ἀσυνπαθής)を人間離れしているとして避ける一方、過度の悲嘆落涙を卑しいことと戒め」た上で、ラザロスの墓で涙を流すイエスを、私たちに「必要な情念」の規準・限界を示す模範として示す (Basil, *Hom. De gratiarum actione* 5)。この限りでのアパテイアは、「適度な情念」へと諸情念を理性が支配し導くことを意味し、「抑制」(ἐγκράτεια)に限りなく近づく。『修道士大規定』によれば、真に抑制している人は、低俗な諸情念に打ち克ち、それゆえ、エンクラテイア抑制は罪の破棄、アパテイア情念の除去であり、霊的な生の始まりとみなされている。こうしたいわば中庸としての「適度な情念」や「抑制」の考えは、ストア派ではなくペリパトス派の影響によるところが大であろう。

最後に③「罪の除去・無辜性」という意味でのアパテイアの用法は、バシレイオスのテキスト中には見出せない。このことは、たとえばクレメンスにおいてアパテイアは神性と同様に完全性を意味し得るが、バシレイオスにおいては、人間本性に可能な限り神に似ることの手段としてアパテイアが捉えられていることを示している。こうしたアパテイア理解は、ストア的というより聖書的である。

### 3. アパテイア, エウパテイア, メトリオパテイア

冒頭で、寡婦となったプリソンの妻宛てのバシレイオスの慰めの手紙の書き出し部分を引用したが、プルタルコスによる同じ趣旨の書簡（おそらくバシレイオスの手紙の原型ともいえるもの）、つまり長思いの末に亡くなった息子の父親であるアポロニオスという人物に宛てて書かれた慰めの手紙と比較することによって、いくつかの興味深い論点が浮かび上がってくる。プルタルコスの書簡は、以下のように始まる<sup>10)</sup>。

親愛なるアポロニオス、われわれみながこよなく愛したあなたのご令息が突然に夭逝された報せを聞き及び、いぜんから私はあなたの辛い心中を察し、私も悼みを共にしていました。……あるとき、亡くなったすぐ後にあなたに会いに行き降るかかった運命を、人間に与えられたものとして耐えるようあなたを励ますことは時宜をえませんでした。あなたは身体も魂も予期しない不幸によって弱り果てていましたし、また私もあなたのお気持ちにただ同情 (*συμπαθεῖν*) せざるをえなかったからです。(プルタルコス『モラリア』「アポロニオスへの慰めの手紙」1, 101F-102A)

書簡の形式という点から見れば、プルタルコスの手紙もバシレイオスの手紙も、「慰めの手紙」に備わる当時の慣習的形式にほぼ忠実にしたがっている。たとえば、まず宛先人を襲った不幸の報せを聞いたという事実を確認し、故人の善き人柄ゆえにその報せが差出人にとってどれほど大きな精神的衝撃を与えたかを述べた後、残された遺族の悲しみに心底からの同情

10) テキストはロウプ版 (*Plutarch's Moralia*, vol. II, by F. C. Babbitt, Cambridge, Mass., 1928), 和訳は『プルタルコス：モラリア2』瀬口昌久訳, 京都大学学術出版会, 2001年, 60-2頁を用いた。

を示す、という書き出しの組み立てがそうだ。しかし、もっと重要だと思われるのは、その続きである。

……息子が死んだときの心の苦しみと激しい痛みが、悲しみを引き起こす原因となるのは自然なことであり、それはわれわれの意のままにはならないものです。というのは私としても粗野で無情な冷淡さ<sup>アパテイア</sup>（*ἄγριος καὶ σκληρὰ ἀπάθεια*）を賞賛する人たちには与しません。それは可能でも有益でもありません。なぜなら、そのような冷淡さは、愛したり愛されたりする優しさ（*εὐνοία*）を奪い去ってしまうのですが、それこそ何にもまして保持しなければならないものなのです。しかし、悲嘆（*πένθη*）が限度を超えてさらに増大するならば、自然に反するものとなり、それはわれわれの劣悪な考えによって生じたものであると私は主張します。それもまた、有害で劣悪であり、誠実な人間にはけっしてふさわしくないものとして捨て去らねばなりません。けれども、節度を心得た苦悩（*μετριοπάθεια*）は拒絶すべきではないのです。（同上書「アポロニオスへの慰めの手紙」3, 102C-D）

プルタルコスはここで、ストアのアパテイアに関する教説を、明らかに誤った見解として非難している。プラトニストであるプルタルコスが、ストア派を批判するのは問題ないとしても、では、なぜ「悲しみ」という情念が焦点になったのだろうか？

その問いに答えるために、ここで簡単にストア派の情念論をざっと見直しておこう。初期ストア派において、パトスはすべて賢者の魂からは除去されるべき非理性的な運動、「過剰な衝動」（*ὀρμὴ πλεονάζουσα*）と考えられていた（SVF I, 205ff.）。しかし、ゼノンやクリュシッポスを含む大半のストア派論者たちは、アリストンのような異端的な人物を除き、賢者に完全な無受動、無感動を課そうとしたわけではない。もし賢者がごく普通の人間の衝動にさえ完全に無感覚であるとしたならば、一体、賢者はどうやって適度な情念をそれとして自覚・識別できるというのだろうか。いずれにせよ、プラトンやアリストテレスのような魂の二分ないし三分説を奉じる考えに対して、ストア派は普通（ポセイドニオスのような例外を除き）、いかなる非理性的な要素ももたないロゴスに支配された一なる魂、魂の主導的部分（*ἡγεμονικόν*）に一元化された魂という魂観を主張する。では、そのようにロゴス一元的なストアの賢者の魂は、プラトニストのように非



理性的部分をもつことなしに、一体いかにして、それ自体非理性的である情念をもつことができるのだろうか。このような厄介な問題に直面したストア派の論者たちの対応は決して一様ではない。情念を判断とみなすにせよ（クリュシッポス）、判断に随伴するものとみなすにせよ（ゼノン）、そのいずれにしても、表象に対する理性の指導的部分の同意という合理的要素を情念の構成に必須のものとみなす立場が主流であるが、ポセイドニオスのように情念を非理性的な欲求の力に帰そうとする立場もなかったわけではない。

そのような情念に関するストア的説明の派生形の一つにエウパテイア説がある。エウパテイア（εὐπάθεια）とはセネカによれば、次のようなものである。すなわち、

賢者の魂においては、（情念の）傷が癒えた時でさえ、その傷跡が残る。賢者はそれゆえ、情念それ自体からは解放されているにもかかわらず、情念からの或る暗示や予兆を感じ取ることができるであろう。  
 (*De Ira*, I, 16, 7)

つまり、エウパテイアとは、合理的判断（κρίσις）に密接に関わるいわば情念の痕跡であって、それ自身は情念ではないということになる<sup>11)</sup>。なぜなら、情念はあくまで非理性的なもので、賢者にふさわしいものではないが故に、賢者の判断に資するような情念（的な何か）があるとしても、それ自体はパトスではあり得ないからである。したがって何らかの形で本来の非ロゴス的本性がロゴス化したパトス、不完全な形であれ合理化された情念とみなされ得るものがエウパテイアだと言ってよいだろう。

いずれにせよ、ストア派の四大パトスのうち、少なくとも「悲痛」を除く三つには以下のようにエウパテイアが対応するとみなされている。すなわち、快樂には「喜び」（χαρά）というエウパテイアが、欲望には「願望」（βούλησις）が、恐れには「用心深さ」（εὐλάβεια）がそれぞれ対応するとされる（SVF III 431, 437, 438）。しかし、少なくとも後期ストアに至るまでは、「悲痛」に対応する理性的な要素つまりエウパテイアは語り出

11) セネカには、エウパテイアとは別に、後に「プロパテイア」と呼ばれるようになる情念の前段階にかかわる記述がある（*De Ira*, II, 1-4）。それによれば、プロパテイアとは、情念を準備する（つまりそれ自体は情念ではない）先行段階として、表象によって反射的に引き起こされた本能的な情動を意味する。



されることがなかった。言い換えれば、「悲痛」というパトスを「よいパトス」という形で合理的に魂の機能に一元化することは極めて困難だったという事情をそのことは表しているものと思われる。それゆえ、プルタルコスとバシレイオス、両者の慰めの手紙は、それに合理的な等価物すなわちエウパテイアを置くことが許容されない悲痛・悲嘆というパトスに、期せずして焦点を合わせることとなったのではないか、そう推測できる。

一方のプルタルコスは、反ストアの旗を掲げる中期プラトン主義者として、アパテイア概念をペリパトス派から借用した「適度なパトス」概念と対比することによって、ストア派のアパテイア説を批判・攻撃したものと思われる。ストア派を論難する側から見れば、情念の排除（アパテイア）と適度な情念（メトリオパテイア）の両立は、たとえエウパテイア概念をもってしても、ありそうにもないことだったし、とりわけ悲痛・悲嘆という情念に関してはエウパテイアの画定すらおぼつかなかったのである。そこをまさにプルタルコスは攻撃したわけである。

対してバシレイオスの場合は、事情が異なる。R. ソラブジが指摘するように、我々は確かに「カッパドキア教父たちの内に、二つの非常に異なる文脈を見出す。一つは慰めの手紙や書き物にかかわる文脈。もう一つは理想にかかわる文脈である」<sup>12)</sup>。前者はメトリオパテイアにかかわり、後者はアパテイアにかかわる。では、バシレイオスにおいてこの二つは、プルタルコスにおけるように両立不可能なのだろうか。必ずしもそうとは思われない。そもそもバシレイオスには、ストア派のアパテイア説を批判する必要などありはしなかった。彼の目的は、慰藉のための書き物と修道生活という両方の文脈でキリストに限りなく近づくこと、あくまでもただその一事のみであった。修道生活において、あらゆる情念からの魂の完全な救済であるアパテイアは、修道士たちが、自らの魂を理想的な神的範型に従って浄化することを動機づけるものである。言い換えれば、修道生活の目的は、アパテイアによって彼らの魂の内にある神の似像を回復することにほかならない。その限りで、そのようなアパテイアはエウパテイア概念を介さずとも（前節 2-②で見たように）メトリオパテイアあるいはエンクラテイアに近いものとなるだろう。他方、慰めの手紙の文脈においては、他者を慰めようとする私たちの態度の範型は、キリストであり彼の涙とい

12) R. Sorabji, *Emotion and Peace of Mind: From Stoic Agitation to Christian Temptation*, Oxford, 2000, p. 391.

える。人の痛み、悲しみが癒されることができるのは、ちょうどキリストがラザロスの墓前でしたように、他者が痛みや悲しみを適度な仕方と自分と共に感じてくれること、まさにその点にあるだろう。それゆえ、パシレイオスにおける二つの非常に異なった文脈、すなわちアパテイアとメトリオパテイアは、キリストにおける神性と人性のように、両者矛盾するものではなく、むしろ両立可能であるとひとまずは結論づけることができるのではないだろうか。

---

## ラテン教父におけるストア派倫理学の受容と変容

荻野 弘之

### 序 影響史と比較的方法論

ストア哲学と教父の関係には、複数の循環や「ねじれ」が伏在していて、思想史理解のアナクロニズムを避けるためには、平板な「概念史」や「史料研究」だけに尽きない慎重な方法論的反省を必要とする。東西教父におけるストア哲学の影響・受容史は、プラトン主義の場合と同様に、ギリシア哲学の概念や発想がキリスト教神学に摂取・統合されていく過程において順接と逆接の両方の面をもっていたし、またその比重は個々の教父の場合でかなり異なっている。そもそもパウロが第二回宣教旅行の際、アテネで論戦を交えた相手は当時を代表する「エピクロス派やストア派の哲学者たち」であったが(Act. 17:18)、他方その書簡に散見される徳／悪徳の理解にはすでに同時代のストア派の深甚な影響が刻印されている。つまり批判する側とされる側とが「キリスト教対ストア派」といった単純な二項対立的関係に収容しきれない重複と余剰を孕んでいるのである。同様の事情は、中期プラトン主義の影響下にあるユスティノス、フィロンやグノーシス主義文書においても共通する問題であろう。

さてラテン教父に関していえば、近年ではマルシア・コリッシュが指摘するように、従来のストア哲学の影響史研究においては、ラテン・キリス